

SCHEDULE 4 → 6 月

展覧会・イベントスケジュール

いろんな時代、いろんな世界にトリップ!

2024	4月	5月	6月	Webサイトもチェック!
大阪市立自然史博物館 大阪市東住吉区長居公園1-23 TEL:06-6697-6221 開館時間:9:30~17:00 (入館は閉館の30分前まで) 休館日:月曜(祝日・休日の場合は翌平日、ただし4/30は開館)、年末年始		長居植物園・自然史博物館 開業50周年記念シンポジウム 「植物園・博物館のあるまちづくり」 植物園・博物館のこれまでの歩み、私たちの生活や街づくりに果たす役割、そして目指す未来について語ります。 4/27	特別展 「自然史のイラストレーション ~描いて伝える・描いて楽しむ~」 自然史にまつわる様々な絵や図を紹介し、写真を気軽に撮れる今の時代にこそ、絵や図の面白さを感じてみましょう。 ~5/26	
	大阪歴史博物館 大阪市中央区大手前4-1-32 TEL:06-6946-5728 開館時間:9:30~17:00 (入館は閉館の30分前まで) 休館日:火曜(祝日・休日の場合は翌平日、ただし4/30は開館)、年末年始	特集展示 「再発見!秀吉の大坂城 —金箔瓦と家紋瓦—」 現在、豊臣大坂城石垣公開施設が建設中。発掘資料をもとに当時の姿を紹介します。 4/19~6/3	特集展示 「わたしが難波橋のライオン像をつくりました!! なにわの彫刻家・天岡均一没後100年記念展」 大阪を代表する繁華街、キタとミナミの歴史を館蔵資料を通じてご紹介します。 5/8~7/8	特別企画展 「おおさか街あるき —キタ・ミナミ—」 天岡均一作「ライオン像」(九鬼隆幸氏所蔵)
大阪中之島美術館 大阪市北区中之島4-3-1 TEL:06-6479-0550 開館時間:10:00~17:00 ※2/10~5/6の期間は10:00~18:00 (展覧会会場への入場は閉場の30分前まで) 休館日:月曜(ただし4/1、15、22、29、5/6は開館)、年末年始	「モネ 連作の情景」 1874年に第1回印象派展が開催されてから150年の節目を迎えることを記念し代表作約70点を紹介。 ~5/6	「没後30年 木下佳通代」 没後30年を機に、近年再び注目され始めた作家の代表作を一堂に展示し作家の全貌を紹介。 5/25~8/18	「没後50年 福田平八郎」 没後50年の節目に開催する本展では、初期から晩年までの作品を一堂に展示し、平八郎の画業を広く紹介。 ~5/6	
	「没後50年 福田平八郎」 没後50年の節目に開催する本展では、初期から晩年までの作品を一堂に展示し、平八郎の画業を広く紹介。 ~5/6	「開創1150年記念 醍醐寺 国宝展」 醍醐寺の歴史と美術を「山の寺」「密教修法のセンター」「桃山文化の担い手」という3つのテーマで紹介。 6/15~8/25	「開創1150年記念 醍醐寺 国宝展」 醍醐寺の歴史と美術を「山の寺」「密教修法のセンター」「桃山文化の担い手」という3つのテーマで紹介。 6/15~8/25	
大阪市立東洋陶磁美術館 大阪市北区中之島1-1-26 (中央公会堂東側) TEL:06-6223-0055 開館時間:9:30~17:00 (入館は閉館の30分前まで) 休館日:月曜(祝日・休日の場合は翌平日)、展示替期間、年末年始	2024年 4月12日(金) リニューアルオープン! 約2年間の改修工事を終え、リニューアルオープンします。増築されたエントランス棟や、カフェ、ミュージアムショップも新たにオープンします。 4/12~9/29	リニューアルオープン記念特別展 「シン・東洋陶磁 —MOCOコレクション—」 リニューアルを記念した特別展では、当館(MOCO=モコ)が世界に誇る珠玉のコレクション約380件を、装い新たにご覧いただけます。 4/12~9/29		
	改修工事のため2024年夏(予定)まで休館			
大阪市立科学館 大阪市北区中之島4-2-1 TEL:06-6444-5656	改修工事のため2024年夏(予定)まで休館			
	公式ネットショップでミニブックなどオリジナルグッズを販売中! ミニブック オリジナルマグネット	ただいまリニューアルオープンに向けて準備中!		
大阪市立美術館 大阪市天王寺区茶臼山町1-82 (天王寺公園内) TEL:06-6771-4874	改修工事のため2025年春(予定)まで休館			
	ただいまリニューアルオープンに向けて準備中!			

OSAKA MUSEUMS VOL.28

2024年3月11日発行

発行/(地独)大阪市博物館機構
 大阪市中央区大手前4-1-32 大阪歴史博物館内
 TEL:06-6940-4330(代表)
 制作/(株)ウィルコミュニケーションデザイン研究所

大阪市博物館機構から日々情報を発信しています!



X(旧:Twitter)



Instagram



Facebook



YouTube



アンケートにご協力ください

抽選でチケットをプレゼント!



OSAKA MUSEUMS

VOL. 28
 2024.4→6
 TAKE FREE

見て、感じて、
 開け好奇心。



BACK IN THE

1970s

大阪カルチャー編



大阪市立科学館

個人で、屋外で音楽の楽しさを提供した 《ラジカセ／1978年ソニー製》

居間に家族が集まりレコードプレーヤーで音楽を楽しむ。そんな日常風景を一変させたのが「ラジカセ」の登場です。1967年にカセットテープレコーダーが発売され、1968年に音楽とラジオが楽しめるラジカセが誕生。ラジオの音楽や自分の声を気軽に録音できるようになったことから音楽がより身近な存在になり、1970年代にはラジカセブームが巻き起こりました。さらに、1978年にヘッドホンステレオが発売され、音楽も一家に一台の時代から、一人一台の時代へ。こうした家電製品の小型化&パーソナルユース化の背景には、60～70年代の技術の発達があったことは言うまでもありません。近頃昭和レトロブームですが、家電たちがそれぞれに紡いできた歴史を思うと、ますます愛おしく見えてきますね。

ラジカセの登場が、 音楽の楽しみ方を変えた!



アナログな押しボタン式。本体にカセットテープを挿入して録音できる。



現行品とそれほど形状が変わらない家電も。

★2024年夏のリニューアルオープン後に展示予定!



大阪が培った
科学技術を発信します。
吉岡克己 副館長

福井に住んでいた4歳の私を大阪万博に連れ出してくれたのは、広島に住む祖母でした。神戸の親戚宅に宿泊し、電車からの景色をワクワクと眺めたことや会場の行列が断片的に思い出され、今も手元には当時のスタンプ帳が残っています。私の幼稚園の卒園アルバムには将来の夢として「科学者」の文字が。これも万博のレガシー?

1970年代は科学技術が急激に生活に入り込んだ時代です。小学校低学年の頃、父はそろばん片手に仕事をしていましたが、ある日卓上計算機を持ち帰って、私は緑の数字が変わるのに夢になりました。中学年ではラジオを分解して、高学年では天体観測にはまり…。科学は身近にありました。

科学技術はグローバルなもので地域性はないと思われがちですが、科学が人の営みの中で発展してきた以上、科学者の個性や発明・発見を生んだ地理的・社会的背景が存在します。当館では特に大阪で培われた科学技術など、大阪が科学進歩に与えたインパクトを実物資料中心にアピールしていきます。

2025年の万博に向けてパワーアップしますので、今夏のリニューアルオープンにご期待ください。

大阪のミュージアムの魅力を
もっとチェック!

大阪市の6つの
博物館・美術館が
2025年大阪・関西万博に
合わせて

「大阪博」を開催!



各館が選定した「大阪の宝」120点を一斉公開するWeb展覧会のほか、2025年には実際に各館で「大阪の宝」を展示予定。Webサイトではミュージアムを巡って遊ぶプランなど多彩なコンテンツを発信していきます。

詳しくはこちらから▶▶▶



BACK IN THE 1970s

ユニークでクール! 大阪カルチャー編

OSAKA MUSEUMSでは、前号と今号の2号に渡って万博を大特集。今号では日本中が好景気にわいた1970年代にタイムトリップ! 激動と言われる時代に花開いためくるめくカルチャーをご覧ください。



名品陶磁器の特別展を
ぜひお楽しみください。
大阪市立東洋陶磁美術館
守屋 雅史 館長

東京の下町から家族で団体旅行の一員として大阪万博を訪れたのは、中学2年生のとき。断片的ながら、宿が宿坊だったので「お寺で泊まれるんだ」との驚きや、万博会場のインド館の近くで食べたカレーのことが思い出されます。私は初めての本場の香辛料の味が口に合わず食べられませんでした。父が美味しいと言っているのを、どんな味覚なんだと不思議に思ったものです(笑)。世界を知った経験でした。

当館はこの大阪万博の後に誕生しました。最大の特徴は、住友グループ寄贈の安宅コレクションと、李秉昌コレクションを中心とした質の高い中国・韓国陶磁の数々。2025年の万博の時期は当館では、所蔵品を核としながら、中国・韓国・日本など東アジア各地で生産された陶磁器の特別展を企画しています。世界各地から来阪された方々に、当館の美しい陶磁器と特別展のために各地から拝借した名品の数々をご覧いただく体験を通じて、自身の感性のきらめきを感じていただければと考えております。

大阪市立東洋陶磁美術館

世界有数の名品ながら 散逸の危機に瀕した 国宝《飛青磁 花生》

鉄斑を散らした青磁は日本では「飛青磁」と呼ばれ、中でも本作は釉色・鉄斑の現れ方が優れた名作。俗に玉壺春瓶と呼ばれる容器で、ほっそりしたくびと豊かに膨らんだ胴部が好対照をなし、見事な均整美を見せています。国宝に指定された本作が、1960年代には民間企業のコレクションとなりました。所蔵者は戦後大阪で十大商社の一つに数えられた安宅産業株式会社。収集の中心人物は、元会長・安宅英一氏。彼の透徹した美意識が反映されたコレクションは世界有数の東洋陶磁コレクションと言われ、百貨店での展覧会を中心に作品が公開されると注目を集めるようになりました。しかし、安宅産業はその後に経営危機に陥り、その歴史に幕を閉じました。コレクションの行方が注目される中、主要取引銀行の住友銀行をはじめとする住友グループが、売却ではなく大阪市への寄贈を英断。これらの作品を引き継ぎ、展示・保管施設として大阪市立東洋陶磁美術館が開館しました。安住の地を得て静かに佇む花生を通して、時代の大きなうねりを感じることができます。

激動の 日本経済を 生き延びた、 国宝の輝き。

2024年
4月12日(金)
リニューアル
オープン!

★リニューアル
オープン記念特別展
「シン・東洋陶磁
—MOCOコレクション—
で展示!



「春」には酒の意味もあるので、玉壺春瓶とは玉のごとき美しい酒瓶のことを指すと推察される。お酒を飲みほした後に、春の可憐な花を一輪挿してみたくなる端正な姿の瓶。

国宝 元時代 14世紀
龍泉窯 大阪市立東洋
陶磁美術館(住友グル
ープ寄贈/安宅コレク
ション)写真:六田知弘

大阪歴史博物館

400年以上前から形を変えずに現代で出土
《金箔桐文方形飾瓦》

1971年に森ノ宮で行われた、遺跡の発掘調査の際に出土した「金箔桐文方形飾瓦」。金箔で彩られ、桐の花の文様が残るその姿は、かつてないほど美しい状態で発掘され、大阪市の有形文化財に指定されました。基本的に欠損した状態で見つかることが多い飾瓦ですが、これはほぼ無傷の状態。その理由は明らかでないものの、偶然にも井戸の中に投げ込まれたことで土の圧力などの影響を受けにくく、当時の原形を留めることができたかと考察されています。さらにこの飾瓦が貴重な有形文化財として指定されている理由には保存状態の良さに加え、桐の花の文様が関係しているよう。豊臣秀吉が家臣の大名に桐文の使用を認めていたことと、出土場所が大坂城に近いことから、家臣の屋敷の瓦に使われていたものではないかと考えられています。この一枚の瓦が教えてくれるのは、大坂城の敷地の範囲や400年以上前に使われていた建築材料などさまざま。眺めていると城だけでなく、大名屋敷にまで豪華な瓦を使った大坂城下町の豊かさが想像できます。

★～5/6(月・振休)まで、8階特集展示室の
特集展示「再発見! 秀吉の大坂城—金箔瓦と家紋瓦—」で展示中。

桐の文様は
豊臣秀吉への忠誠の証?
当時の美しさを残した金箔瓦。



大阪市立美術館

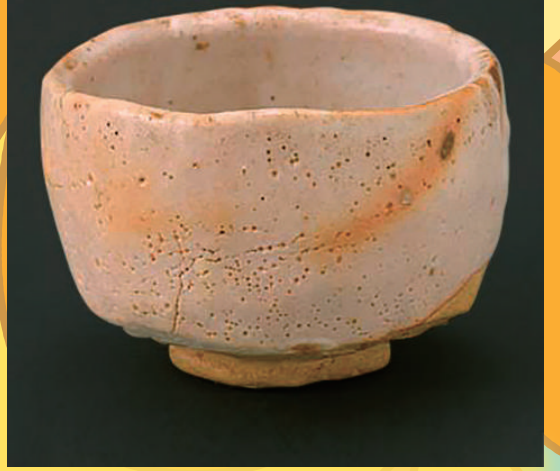
精力的に創作活動を行った人間国宝
荒川豊蔵《志野茶碗》

日本中が万博にわいた時代に、ひたむきに創作を続けたある人物をご存知ですか?昭和を代表する陶芸家・荒川豊蔵が陶芸の道に進んだのは1920年代。桃山時代の志野焼に魅力を感じる一方、土の特徴から志野が瀬戸焼であるとの当時の定説に疑問を抱き、調査に着手します。そして1930(昭和5)年、美濃の窯跡で志野陶片を発見。志野が美濃焼であることを証明し、陶芸の歴史を塗り替えました。荒川はこれを機に志野の再現を志し、「荒川志野」と呼ばれる独自の作風を確立。1955(昭和30)年に人間国宝に認定されました。1971(昭和46)年には文化勲章も受章し、美濃のほか各地の窯でも作陶するなど精力的に創作活動を行いました。

大阪市立美術館が所蔵する本作は、桃山時代の志野焼を彷彿とさせる白い釉薬や緋色の模様に加え、ぼつりとした造形ややわらかな質感に荒川らしいあたたか味を感じることができます。お祭りムードの1970年代、決して派手ではないこの茶碗が、人々の心に穏やかなひとときをもたらしたのかもしれない。

★2025年春のリニューアルオープン記念展にて展示予定!

時代の喧騒を忘れる、
茶碗のぬくもり。



荒川豊蔵《志野茶碗》昭和期 大阪市立美術館蔵
(家田秋蔵氏寄贈)



箱の左下には、長年に渡り作陶を続けた地の“大置”の文字が記されている。



1館訪れるならココ!
と思ってもらえる
美術館をめざします。
大阪中之島美術館
菅谷富夫館長

トカゲたち。
やってきた
大阪に
南洋材に乗って

大阪市立自然史博物館

物流とともに海外の生き物が日本に侵入
《1970年代の外来生物》

さまざまな生き物が日本に入り込むようになりました。特に、大阪港や神戸港には世界各地から木材や穀物、綿や羊毛などの物資が船で運ばれ、その積み荷に紛れ込んだ植物のタネや昆虫などが日本に上陸。検疫で発見されるものもありましたが、それでも侵入を防げず、そのまま日本に定着した生物も少なくありません。このような生き物を「外来生物」と言いますが、当時は海外から侵入した生き物が、日本の生態系に影響を与えるという視点はほとんどありませんでした。外来生物の影響

が目目されるようになったのは1990年代後半。2005年には「外来生物法」が施行され、飼育や放流、輸送などがより厳しく規制されるようになりましたが、外来生物はまだまだ増え続け解決すべき課題となっています。

1970年代は高度経済成長の時代。海外との交易が活発化し物流がさかんになったと同時に、



輸入木材に紛れて入ってきた生き物たち。左から イチジクカミキリ、ミズオトカゲ、チャグロソソリ

★1階 第1展示室「港で見つかる外来生物」で展示中。

大阪中之島美術館

戦後の日本を代表するデザイナー
早川良雄《国立国際美術館開館》

国立国際美術館—開館

昭和52年10月15日 大阪・万博公園



早川良雄《国立国際美術館開館》1977年 大阪中之島美術館蔵

パステルカラーのやわらかな色使いながらインパクトのある表現。早川良雄は商業広告の依頼を受けながら、独自の作品制作にも精力的に取り組み、後進デザイナーに多大な影響を与えた。

込めたのは大阪愛!?! やさしくも
芯のある美術館のポスター。

千葉の国鉄駅で母が大阪万博に行くためのチケットを取ってくれたのは、私が小学6年生のときでした。東京から初めて新幹線に乗り、着いた大阪の感想は「暑いところだな」ということ。万博会場では、大きなパビリオンは行列のため、小さな館をいくつも回りました。そんな記憶からはじまる1970年代は多感な時期でした。中学でロックにめざめ、高校でバンドを組みますが演奏が全然ダメ。大学で演劇研究会に入っても半年で辞めたり、何かになりたいと思っても何もできない時期でした。当時は本気でしたが、今考えるとそれが楽しかったんでしょうね。

2025年には多くの方が来阪され、万博とともに観光を楽しまれるでしょう。当館は、どこか1館、博物館・美術館に行こうと思ったときに選ばれる美術館になりたいと思っています。万博の会期に合わせて、万博のテーマと一部通じる展覧会や、日本の美術をテーマにした展覧会を準備していますので、ぜひ中之島へお越しください。

早川良雄は大阪を代表するグラフィックデザイナーの1人。この作品は1970年の大阪万博の会場に建てられた「万国博美術館」が、国立国際美術館として1977年に開館した際のポスターです。描いているのは、建物そのものではなく白い円柱のようなもの。なぜ美術館のモチーフがこの形であるのか、なぜ真っ白なのかという理由は明らかになっていませんが、淡いパステルの色あいとどっしりとそびえる円柱の組み合わせが、早川ならではのやさしくも芯のある世界観を強く印象付けています。

早川の経歴をさかのぼると、最初に就職したのが大阪にある百貨店の装飾部で、戦

後別の百貨店の宣伝部に転職した後フリーランスに。1961年には東京に進出し、顔シリーズ・形状シリーズなどの代表作をはじめ、斬新な広告やポスターを多数手がけます。自身のデザインを追求しながら活躍の場を広げた早川が、この国立国際美術館開館のポスターを制作したのは東京に移ってからのこと。生まれ育った大阪への想いを込めて、デザインに向き合ったのかもしれません。

大阪府立自然史博物館

見どころも
映えな
View



足跡は、長居公園近隣の
中学校から発掘されたものを
忠実に再現!

ヨコから、上から、ゾウたちをじっくり観察。

2階ギャラリーから見るナウマンホール

入り口でお客さんを出迎えるナウマンゾウたち。正面から見ても迫力満点ですが、2階ギャラリーから見下ろすのもおすすめです。ナウマンゾウのキバの長さや大きさ、体格など、階段を上りながらいろんな角度から眺めることができます。上から見ると、足跡化石もくっきり。ぜひ、これほど大きな動物が闊歩していた太古の大阪を想像しながらご覧ください。

2024年
4月12日(金)
リニューアル
オープン!

★リニューアル
オープン記念特別展
「シン・東洋陶磁
—MOCOコレクション」
で展示!



大阪市立東洋陶磁美術館(住友グループ寄贈/安宅コレクション)
写真:六田春彦

モジュン
びと

推したくなる!



小鳥のさえぐりに
耳を傾ける姿が
なんとチャーミング。

備(よう)は副葬品で、
木や土で作られた
人形のことを
言います。

かさい ふじょう
2階・展示室9(中国陶磁室)の加彩婦女備

少女のようなあどけなさの中に凛とした気品を感じさせる本作は、唐時代に墓の副葬品として作られました。開元年間(713~741)から天宝年間(742~756)頃になると、墓の壁画や副葬品に表された女性像は細身のスタイルからふっくら豊富なスタイルへと変化。本作はそうした女性像の傑作の一つで、左手には本来小鳥がとまっていたらしく、さえぐりに耳を傾けるように首をかしげた姿がチャーミングです。本来は華やかな彩色が施されており、色鮮やかな盛唐美人を想像すると、より魅力的に見えてきます。

大阪市立東洋陶磁美術館

地域によって呼び方が異なる場合も。

Q 発掘現場はナゾワードだらけ!
「ネコ」ってどんな意味?



A ネコとは、土運びの一輪車(手押し車)のこと。土木・建築現場の狭い通路「キャットウォーク」を通ることが由来とも言われますが、諸説あります。ほかにも、測量機器のトランシットを略してトラ、移植ゴテをテスコ、草刈り鎌の一種でしゃがんで土を掘ったり削ったりするガリ、立って土を削ったり土砂をかき寄せたりするジョレン(鋤簾)など、特有の呼び名がたくさんあります。道具の名前を覚えることは、スムーズに作業を進める第一歩です。

回答担当:清水和明さん(学芸員)



大阪市文化財協会

知りたい
気持ちに
学芸員が
お答え!



発掘調査によって出土した大阪の文化財を見ることができる!



〒540-0006 大阪市中央区法円坂1-6-41
開館時間/9:00~17:00
休館日/土曜・日曜・祝日、年末年始

見学は電話での
事前予約をお願いします。
TEL:06-6943-6833



釣れない時間が生んだ、日本画の問題作?

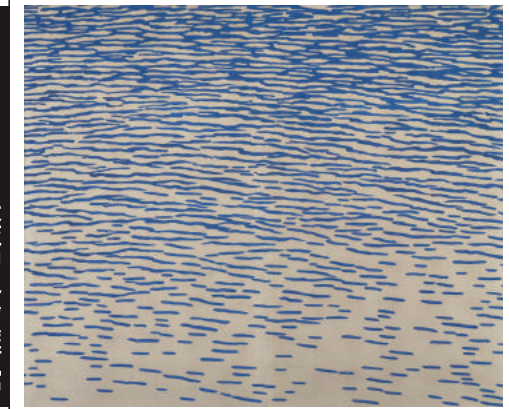
福田平八郎(さざなみ)

釣り好きだったとして知られる福田平八郎が、水面の漣を描いた本作。1932(昭和7)年に琵琶湖で釣りをした際、不漁のために浮きをにらむ目を水面に移したところ、微風による水面の美しい動きに気がつき、「これを絵にしてみよう」と思いついたのだとか。日本画の装飾的伝統に、自然観察による写実を融合した本作は、同年の帝展に発表されると「一番の問題作だ」と話題になり、当時の日本画家たちに大きな衝撃と刺激を与えました。

名作・名品の
ウラ側を
探る!



推しの真相



福田平八郎《漣》重要文化財 昭和7年(1932)大阪中之島美術館蔵
プラチナ箔と金箔を重ねることで表現された、漣の美しい動きが見どころのひとつ。
★~5/6(月・振休)「没後50年 福田平八郎」展にて展示!

大阪中之島美術館

これはレア!

COLLECTOR'S EYE

コレクターズアイ

ロマンあふれる
古代宮殿の遺物から、
日常使いのアイテムが誕生!

しび みょうぶ
鷗尾ポーチ&命婦礼服エコバック
/¥4,070(税込)

ネットショップでも
購入可能!



古代宮殿・難波宮の位置を明らかにする大きな鍵となった「鷗尾」と、宮殿で働いていた女官の装束文様が、いつでも持ち歩けるエコバックに!学芸員とフェリシモ社とのコラボによって、文様を細部まで表現しながら、素材や使い勝手にもこだわりました。日常のふとした瞬間に、大阪の歴史に文字通り「触れられる」、新感覚のアイテムです。

大阪歴史博物館

みんなで作り上げている。
ミュージアムのお仕事



大阪市立科学館

常設展示場を改装中!
2024年夏のリニューアル
オープンをお楽しみに!

目に見える鉱物や結晶を通じて、
目に見えない原子の魅力を伝えたい!

飯山青海さん(学芸員)

「私は化学のフロアで、原子の存在を伝える展示を担当しています。身の回りの物質は原子でできていますが、原子はとても小さく目に見えません。そこで、鉱物・結晶・金属といった物質からいかに原子の働きを感じ取ってもらえるか、展示方法を模索しています。また、プラネタリウムの企画や生解説も行っていきます。展示の工夫や生解説を通じて、一人でも多くの方に科学の楽しさが伝わるとうれしいです。」

まだある!
ユニークで何か気になる
ミュージアムの
推しなコト。

ミュージアム
の推しごと